



救急車は、サイレンを鳴らしながら千代川の土手沿いの道に出ました。河口にある鳥取県立中央病院の明かりが見えはじめました。時折乱れる心電図モニターに目を落しながらも、ほつと一息。今日も長い四十五分でした。

深刻な医師不足

鳥取県には、離島や山奥の地理的に厳しい診療所はあまりなく、私自身はその診療所に勤務することすらなく義務年限を終えてしまいました。二つの地域中核病院に勤務しましたが、遠い方の中国山地のふもとの病院でも、臨床研修を受けた鳥取市の県立中央病院まで救急車で四十五分という近さでした。県立中央病院で一九八七年か

患者搬送 今は後輩の手に

ら、緊急冠動脈インターベンション(心臓カテーテル治療)が二十四時間体制で行われるようになりまし。現在では、当た

り前のことですが、当時として画期的なことでした。それに伴い、一刻も早く患者様を送り届けることが重要とな

が、半ばにして結果的に私が、循環器科の後を引き受けることになりました。二年後に義務年限が終了した九期生の那須博司先生とは、今日も一緒に働いています。現在では、鳥取市には冠動脈インターベンションを行う施設が四つに増え、創成期のような忙しさはなくなりました。

おせになつたね

当時の救急車にはもちろん除細動器はなく、心電図モニターも簡易式の頼りないものでした。出発の時には、カルテやレントゲン袋のほか、大きな黒い救急バッグをひとつ手渡されました。幸運なことに私は一度もこのバッグを開けることはありませんでした。

それでも、鳥取県東部や兵庫県の西北部の地域中核病院や国保診療所からは、変わらず患者様を送っていただいています。自分たちが搬送していたころを思い出して「ありがとう。ごくろつさま」と感謝しています。

吉田 泰之 7期生、1984年卒



鳥取県立中央病院

鳥取県立中央病院

【私の勤務地】県立中央病院は、自治医大が開学して以来の研修指定病院で、卒業生は全員ここで初期研修を受けてきた。現在は、新医師研修制度下で、鳥取大など他大学も含め16人が研修中。

病院に着くと必ず、循環器科を一人で切り盛りしていたS先生が「ありがとう。ごくろつさま」と、笑顔で迎えてくださいました。九三年に義務年限が終了し、お世話になったS先生の部下として、県立中央病院に循環器科医として就職することに。今度は後輩の先生方から患者様を託される側となりました。

「おせになつたね」(おとなに、転じて鳥取では立派に、一人前への意)。心の中で、ひとこと声をかけました。

(次回予定は岐阜県)